

鏡の中の雲

雲が何かに似て見えるのは、連想したものを投げかけた途端、雲がそれを受け止め応えていると感じるからだろうか。

そんな何気ない雲との対話によって、目の前の雲は雲でありながら、何かまったく別のものと結びついている。そのとき、雲とそれを見ている者の間には、イメージが生まれていると言えるのではないか。

雲という対象と見る者の間にイメージが生まれる。そのことが両者の関係を親密なものにしているが、不思議にも目の前に浮かんだイメージは、また別のところにあるようにも思える。

もしかしたら、イメージが生まれるときにしか意識できない空間があるのではないだろうか。見る者と対象の間にはあらゆるイメージが映し出されるが、それ自体では見ることができない。それは、そこに映るものを見ることでしか認識できない鏡のような空間なのかもしれない。

例えば、実際に絵を描き、またそれを見る場合、その空間は絵の平面的な画面としてあるよりも、むしろ描く過程や、見ることのうちにあるのではないか。イメージを捉えようと重ねた絵の具の層のうちに、あるいは、それに向き合う者が投げかけた無数の視線のうちに。

その空間に映るものは、やがて雲のように刻一刻と姿を変えながら、描く者・見る者が投げかけた記憶からも遠ざかっていく。そしてまた誰かが思い描く新たなイメージが生まれる場所として引き継がれていく。

そうしたイメージの連鎖が生まれる瞬間を作り出したくて、絵を描いているのかもしれない。

森本太郎